



# 広安里 第10号

発行 釜山日本人学校  
釜山広域市水営区民樂路 19 番道 11  
TEL 051-753-4166  
FAX 051-756-4851  
<http://user.chollian.net/~pusjpnsc>

## 「ほめる」ということについて

釜山日本人学校教頭 佐藤 正人

どの家庭においても子育ては大変なことです。大きな喜びでもあり楽しみでもあります。そのような中で、「ほめる」と「叱る」ことは、車の両輪のように子どもの成長にとって大切なことです。このことは親の大切な役割です。今回私は、子どもを「ほめる」ことに焦点をあてながら自身の考えを述べたいと思います。

私は、父の勤めの関係で小学校2年生の時に今住んでいる新潟・柏崎に来ました。当時、吉田君というとても絵のうまい同級生がいました。その同級生のお父さん、おじいさんはともに美術の先生でした。おじいさんの名前は、吉田好道さんといいます。好道さんとその教え子に関わる話です。

皆さんは死刑囚・島秋人という人の名前を聞いたことがありますか。島秋人は本名を中村覚といいます。幼い頃満州で過ごし、終戦で柏崎に引き揚げてきました。柏崎に来て間もなく、母は結核でなくなり、自身も病弱になりました。学校でもいやな思いもたくさんしたそうです。学校がいやになった秋人はうそをつき、学校をさぼり、1日中神社の裏の草藪等で過ごしていたそうです。父にも冷たく扱われ、性格はひねくれていきました。喧嘩早くなり、盗みまでして少年院に入れられました。少年院から出ても、金もありませんでした。24歳の時、農家に泥棒に入り、その主婦を殺してしまいました。裁判では「情状酌量の余地なし」として死刑が言い渡されました。死刑囚となってから彼は、子ども時代のことを思い出し、小学校でも中学校でも先生からほめられたことがないのに、たった1回だけ先生から認めてもらう言葉をもったそうです。中学1年生の時、担任で美術の先生だった吉田好道先生が、秋人の絵を美術の授業中にみんなに見せながら次のように言ったそうです。

「絵は下手だが、クラスで一番構図がいいよ。」

その言葉を心の中にずっと持ち続けていた秋人は、好道先生に獄中から手紙を書きました。間もなく好道先生から手紙が届きました。その中に好道先生の奥さんの短歌が三首ありました。それを読んだことがきっかけとなって短歌を作ったり、好道先生の奥さんと手紙や短歌の交換をしたりすることが始まりました。その後、毎日新聞の歌壇に投稿を始めます。そのいくつかが選者の目にとまり、毎日歌壇賞を受賞します。秋人は文通で知り合った友人に次のような手紙を送りました。「吉田先生のたった一言のほめ言葉が私を救い、私の人生を変えた。私のような愚か者でも、7年間という長い年月には少しは人が認めてくれる歌を詠むことができた。」そして昭和42年11月2日に処刑される前夜に、次のような短歌を詠みました。

土近き部屋に移され処刑待つひととき温きいのち愛しむ  
この澄める心ありとは識らず来て刑死の明日に迫る夜温し



このことから教師の一言は大変影響力があることを教えられる思いがします。好道さんの声かけのように、時には人の一生を左右するくらいによい影響を与えることもあります。おそらく好道さんは、自身の言葉が秋人の人生にこれほどまでに影響を与えるなどとは当時は決して思わなかったはずですが、このことは教師だけにいえることではないと思います。家庭でも同じです。父として母として、子どもに本音で語ることです。子どもへの「ほめ言葉」一つで、子どもの意欲・頑張りに大いに影響を与えます。ほめて育てるという姿勢がまず大切です。もちろんよくないことをしたときには、厳しく叱ることも大切です。要はバランスを大切にしながらほめたり叱ったりすることです。子どもの人間的成長を助けるために、子どもをほめて育てることの大切さを中心に述べさせていただきました。

参考資料：新潟日報「日報抄」(平成18年10月19日)等